

「マティアが使徒に選ばれる」

2016年02月10日

使徒言行録1章21節～26節。「そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人を立てて、次のように祈った。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示してください。ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、使徒としてのこの任務を継がせるためです。」二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。

ペトロは、聖霊が降るのを待つ120人の仲間を前にして語った。仲間の一人だったイスカリオテのユダは使徒としての任務を与えられていた。彼の自らの意志で主イエスを売り渡した背信行為が、旧約聖書の預言を実現する神の秘儀を全うする務めになった。そのユダは悲惨な最期を遂げたが、詩編109編8節で「その務めは、ほかの人が引き受けるがよい」と預言されているように、彼に変わる使徒を選ばなければならないと訴えた。使徒は12人という完全数でなければならなかったのである。

使徒として選ばれる条件は「主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者」としている。洗礼者ヨハネの時から、主イエスと生活を共にし、天に昇られた時まで、一緒にいた者とされている。ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネが召された時から、同じく弟子となり、昇天を仰いだ者ということになるが、そのような弟子がいたのであろうか。主イエスから親しく教えを受けた者ということであろう。その者たちの中から、一人を選び、主イエスの復活の証人とする。

「バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人」が条件を満たす者として立てられた。ヨセフとマティアがどんな人であったのかは全く分からない。仲間たちは「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示してください。ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、使徒としてのこの任務を継がせるためです」と祈った。人間の全ての思いを知られる全能の神よ、ユダがいなくなった今、使徒の任務を継がせるために、ヨセフとマティアのどちらを選ばれるかお示してくださいと祈った。

くじを引くとマティアに当たった。神の御心はくじで、マティアに示され、11人の使徒に加えられることになった。その後のマティアの働きについては、使徒言行録は全く記していない。12使徒の体制を整えて、聖霊降臨を待つことになった。

復活した主イエスに出会った使徒たちは、仲間と共に「主イエスは生きておられる」と喜んだ。しばしば、神の国について教えも受けた。しかし、この出来事が何を意味するのか理解できないでいた。復活の時から聖霊降臨日までの50日間、彼らは喜びと戸惑いの日々を過ごしたであろう。熱心に祈りながら待ったのであるが、その間に、次の行動を起こすために、準備を怠らなかつた。待つことは祈ることで、それは、怠らないで備えをすることである